

## 2015年度新入生による「学生相談室アンケート」の結果に関する 教育臨床心理学的考察

*Psycho-Educational and Psycho-Clinical Examinations of New Students' Replies  
to the Questionnaire Conducted by Center for Student Counseling (2015)*

渡邊美由記 *Miyuki Watanabe*

(学生相談室)

木村美奈子 *Minako Kimura*

(学生相談室長・デザイン学部教養部会)

橋本 裕明 *Hiroaki Hashimoto*

(学生部長・デザイン学部教養部会)

栗津 幹子 *Mikiko Awazu*

(学生相談室)

井村 安之 *Yasuyuki Imura*

(学生相談室)

伊藤 由夏 *Yuka Ito*

(学生相談室)

北岡 智子 *Tomoko Kitaoka*

(学生相談室)

山内恵理子 *Eriko Yamauchi*

(学生相談室)

「大学全入時代」から、発達障害者支援と特別支援教育の時代を迎え、新入生の学力はもちろん、入学動機や勉強意欲は変化し、多様化している。その多様化している学生のニーズに応えるために、大学もきめ細かい理解と配慮でもって対応しようと努力を重ね、変化することが求められている。大学へ入ってくる学生が、少子化や様々な入試スタイルによって多様化することに加え、昨今では青年期の延長やその質の変化が指摘されるようになって久しい。

すでに北岡<sup>4)</sup>、栗津<sup>1)</sup>らが指摘しているように、近年の大学生の心理的特徴として「悩めない」学生や、「自身の感情の把握や内面の言語化を苦手とする」学生が本学でも増加している。また、桐山<sup>3)</sup>は、現代の若者について「他者との関係を避けることで混乱を回避し、自己の安全を保つという方向に進んできているように思われる」と述べ、鍋田<sup>5)</sup>は現代型のうつ病の特徴を「マイペースで適応できている限りは抑うつにならないが、頑張らなくてはならない局面や、対人関係を含む嫌いな局面などには、ひたすら避けようとする傾向」が強く、「困るとひきこもる、避けるしか方法がなくなる」のは「病態化していない適応している若者にもみられる」と述べている。

本学学生相談室でも、多様化する学生のニーズに応え、“より効果的な支援”または“より積極的な働きかけ”を行うために、様々な検討を行ってきた。「学生相談室アンケート」も、こうした検討の中から企画された試みの一つである。「本学の新入生が『どのような“これまでの生活”を送ってきており、どのような“本学への志望から入学まで”を経験しており、どのような“本学での生活”を希望しており、そしてどのような“現在の心境”を持っているか』<sup>2)</sup>』<sup>2)</sup>」<sup>2)</sup>についての実態調査を行い、その結果を「教育臨床心理学」ないし「教育現場における心理臨床」の視点から検討しようとしてきた<sup>2)</sup>が、今年度も行ったのでここに報告する。

### 調査の概要

- (1) 調査方法：昨年度実施した「学生相談室アンケート」と同一項目による質問紙調査
- (2) 調査日時：以下の日程で行った各学部向けの学生相談室ガイダンスの際に実施  
2015年4月4日（音楽学部、人間発達学部）  
2015年4月7日（美術学部、デザイン学部）
- (3) 調査対象：2015年度入学生全員（511名）

### 結果と考察

#### 1. 調査回収率

調査への回答者数及び回答率は表1に示した通りである。入学者数511名に対し回答者は468名であり、回答率は92.0%であった。学部、学科間での若干のばらつきはあるが大学全体では88%~100%と、本年度も例年通り良好な回収率を示している。

#### 2. これまでの生活について

「高校時代の生活」を振り返っての満足度を表2に示した。全体では81.4%の新入生が「満足であった」「どちらかといえば満足であった」と答えており、「どちらかという不満であった」「不満であった」とするものは7.0%と低く、調査開始以来一貫した傾向を示している。本学入学者が高校時代の生活に満足しており、高校生活が充実していたことがうかがえる。

一方、「受験生活」の満足度では、「満足であった」「どちらかといえば満足であった」と答えた新入生は60.1%にとどまった。しかし「どちらかといえば不満であった」「不満であった」と答えた者は「高校生活」と同様7.4%と低い。36.8%の新入生が「どちらともいえない」と答えており、こちらも例年とほぼおなじくらいの割合となっている。「高校生活」と「受験生活」とで満足度が異なっていることは、「高校生活」が緊張感の高い「受験生活」一色ではなく、勉学や友人関係その他の様々な有意義で豊かな経験をし得たことが想像される。

表1 回答者および回答率

	音楽学部		美術学部			デザイン学部	人間発達学部	名芸大全体
	演奏	音楽文化創造	絵	アートクリエイター				
				計	計			
入学者数	45	83	51	46	97	186	100	511
回答者数 (%)	45 (100)	73 (88)	49 (96)	43 (93)	92 (95)	159 (85)	99 (99)	468 (92)

表2 1. これまでの生活について

1-1 高校時代の生活を振り返って全体として

	音楽学部		美術学部			デザイン学部	人間発達学部	名芸大全体
	演奏	音楽文化創造	絵	アートクリエイター				
				計	計			
満足であった	60.0	53.4	38.8	41.9	40.2	42.8	58.6	48.9
どちらかといえば満足であった	28.9	28.8	44.9	34.9	40.2	32.7	29.3	32.5
どちらともいえない	6.7	11.0	4.1	16.3	9.8	15.1	9.1	11.3
どちらかといえば不満であった	2.2	5.5	10.2	2.3	6.5	6.3	3.0	5.1
不満であった	2.2	1.4	2.0	2.3	2.2	3.1	0.0	1.9
無回答	0.0	0.0	0.0	2.3	1.1	0.0	0.0	0.2

1-2 受験生活（高校時代および浪人）を振り返って

	音楽学部		美術学部			デザイン学部	人間発達学部	名芸大全体
	演奏	音楽文化創造	絵	アートクリエイター				
				計	計			
満足であった	37.8	45.2	24.5	44.2	33.7	23.3	33.3	32.3
どちらかといえば満足であった	37.8	30.1	38.8	27.9	33.7	28.9	14.1	27.8
どちらともいえない	20.0	23.3	20.4	16.3	18.5	34.0	47.5	30.8
どちらかといえば不満であった	4.4	0.0	14.3	9.3	12.0	10.1	3.0	6.8
不満であった	0.0	1.4	2.0	0.0	1.1	3.8	2.0	2.1
無回答	0.0	0.0	0.0	2.3	1.1	0.0	0.0	0.2

表3 2. 本学への志望から入学まで

2-1 本学への受験を決定したのは

	音楽学部			美術学部			デザイン学部	人間発達学部	名芸大全体
	演奏	音楽文化創造	計	絵画	アートクリエイター	計			
中学時代(それ以前)	13.3	1.4	5.9	2.0	4.7	3.3	1.9	2.0	3.2
高校1・2年	31.1	24.7	27.1	16.3	23.3	19.6	24.5	16.2	22.4
高校3年	44.4	71.2	61.0	53.1	62.8	57.6	66.0	71.7	64.3
浪人時代	2.2	0.0	1.7	10.2	0.0	5.4	5.7	0.0	3.4
願書を出す頃	2.2	2.7	2.5	10.2	4.7	7.6	1.3	8.1	4.3
一旦就職してから	2.2	0.0	0.8	2.0	2.3	2.2	0.0	1.0	0.9
他大学に在学中	2.2	0.0	0.8	2.0	2.3	2.2	0.6	1.0	1.1
その他・無回答	0.0	0.0	0.0	4.0	0.0	2.2	0.0	0.0	0.4

2-2 本学の今の学部(学科)を選んだ理由は(3つ以内)

	音楽学部			美術学部			デザイン学部	人間発達学部	名芸大全体
	演奏	音楽文化創造	計	絵画	アートクリエイター	計			
社会的評価が高いから	0.0	1.4	0.8	2.0	0.0	1.1	1.3	1.0	1.1
指導を受けた教員がいるので	51.1	6.8	23.7	4.1	7.0	5.4	4.4	1.0	8.8
就職・将来を考えて	44.4	64.4	56.8	36.7	46.5	41.3	45.3	75.8	53.8
本学(学部)の特徴が自分の性格に合っているから	24.4	43.8	36.4	40.8	72.1	55.4	48.4	28.3	42.5
合格の可能性を考えて	13.3	8.2	10.2	24.5	30.2	27.2	27.7	29.3	23.5
他大学を受験したが入試の結果で	11.1	1.4	5.1	36.7	7.0	22.8	21.4	10.1	15.2
通学距離、家庭の事情で	20.0	8.2	12.7	28.6	9.3	19.6	15.7	19.2	16.5
本学に身近な出身者がいるから	17.8	13.7	15.3	8.2	4.7	6.5	11.3	9.1	10.9
何となく	4.4	6.8	5.9	6.6	7.0	6.5	5.7	6.1	6.0
その他・無回答	11.1	6.8	8.5	6.6	14.0	9.8	3.1	4.0	6.0

2-3 本学(学部)に入学して、あなたの気分は

	音楽学部			美術学部			デザイン学部	人間発達学部	名芸大全体
	演奏	音楽文化創造	計	絵画	アートクリエイター	計			
満足である	40.0	53.4	48.3	20.4	58.1	38.0	39.0	37.4	40.8
どちらかといえば満足である	26.7	30.1	28.8	42.9	23.3	33.7	37.1	30.3	32.9
どちらともいえない	24.4	11.0	16.1	22.4	16.3	19.6	13.8	28.3	18.6
満足ではないが、このままで、頑張りたい	4.4	4.1	4.2	12.2	2.3	7.6	8.2	3.0	6.0
できれば転学部(転学科)したい	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	1.0	0.2
できれば他大学を再受験したい	0.0	0.0	0.0	2.0	0.0	1.1	1.3	0.0	0.6
その他・無回答	4.4	1.4	2.5	0.0	0.0	0.0	0.6	0.0	0.9

表 4 3. 本学での生活について

3-1 履修の方法や勉強の仕方について

	音楽部		美術学部		デザイン学部	人間発達学部	名芸大全体
	演奏	音楽文化創造	絵	アートクリエイター			
よくわかる	0.0	1.4	0.0	7.0	0.0	1.0	1.1
だいたいわかる	13.3	13.7	30.6	32.6	42.8	8.1	25.9
少しわからないところがある	53.3	58.9	49.0	48.8	48.4	38.4	48.5
ほとんどわからず不安である	33.3	23.3	18.4	11.6	8.8	52.5	23.9
無回答	0.0	2.7	2.0	0.0	0.0	0.0	0.6

3-2 勉学に対する意欲

	音楽部		美術学部		デザイン学部	人間発達学部	名芸大全体
	演奏	音楽文化創造	絵	アートクリエイター			
充分ある	66.7	69.9	63.3	53.5	57.2	41.3	57.1
少しある	17.8	24.7	22.4	37.2	28.9	43.4	30.3
どちらともいえない	15.6	5.5	4.1	7.0	7.5	13.1	8.8
あまりない	0.0	0.0	6.1	0.0	5.0	2.0	2.8
まったくない	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
無回答	0.0	0.0	4.1	2.3	1.3	0.0	1.1

3-3 (学内・学外を問わず)現在、親しい友人が

	音楽部		美術学部		デザイン学部	人間発達学部	名芸大全体
	演奏	音楽文化創造	絵	アートクリエイター			
同性にも異性にもいる	51.1	28.8	34.7	60.5	47.2	40.4	43.2
同性のみいる	44.4	57.5	44.9	32.6	43.4	47.5	45.7
異性のみいる	0.0	2.7	0.0	0.0	0.0	5.1	1.5
ほとんどいない	4.4	8.2	10.2	2.3	7.5	6.1	6.8
その他	0.0	0.0	4.1	2.3	1.3	1.0	1.3
無回答	0.0	2.7	6.1	2.3	0.6	0.0	1.5

この中で、〈人間発達学部〉においては「満足であった」「どちらかといえば満足であった」としている者とがそれぞれ33.3%、14.1%と低く、「どちらともいえない」と答えた者が47.5%と圧倒的に高く、前者とほぼ同率存在し、他学部とは傾向を異にしている。このことが芸術系学部と教育系学部という受験スタイルが異なるために起こることなのか、〈人間発達学部〉の特徴であるのかをここで明確にすることはできないが、各学部・コースによって異なる傾向を持っていることが示されている。

### 3. 本学への志望から入学まで

「本学への受験を決定した時期」「学部、学科の選択理由」ならびに「本学へ入学した気分」について尋ねた結果を表3に示した。

「受験を決定した時期」については、全体では「高校3年」が64.3%と最も多い。数字のばらつきはあるもののどの学部・学科においても最も高くなっており（〔演奏〕44.4%～〈人間関係学部〉71.7%）、次いで「高校1・2年」が高く、85%を超える多くの学生が高校時代に決定していることが示されている。高校時代での決定が75.5%と全体の数値よりも低くなっている〔演奏〕では、「中学時代」が13.3%と他学部、他学科よりも高くなっており、より早期に決定していることが示されている。〔絵画〕においても同様に、高校時代での決定は全体の数値よりも低く69.4%となっている。〔絵画〕では、他学部・他学科では低い（0%～5%）「浪人時代」「願書を出す頃」と答えた者がそれぞれ10.2%ずつ存在している。

「学部、学科の選択理由」では3つ選択できることもあり、学部・学科間で各項目に数字がばらついているが、多くは「就職・将来を考えて」、「本学の特徴が自分の性格に合っているから」、「合格の可能性を考えて」が本学を受験してきていると言えよう。細部を見ると〔演奏〕では「指導を受けたい教員がいる」が50%を超えており、受験を決定した時期が他の学部や学科よりも早期であった結果と関係していることが推測される。〔絵画〕では「他大学を受験したが入試の結果で」と答えた者が36.7%と他学部・他学科よりも高くなっている。これは、高校生活や受験生活に関しても「どちらかといえば不満であった」ないし「不満であった」とする者の割合が高かったことも併せて考えると、少なからず不本意な入学になっている学生の存在が示唆される。また、多くはないが「なんとなく」入学してきた学生もおり（各学部・コースに6%前後）、意欲や主体性という点で、大学生活へとどう移行していくのか、学生相談室としては注意しておきたい。

次に「本学に入学した気分」では、全体としては73.7%の者が「満足である」もしくは「どちらかといえば満足である」と答えており、本学への入学を満足とする者の割合は高い水準にあると言えるであろう。一方で「満足ではないが、このまま頑張りたい」とする者が全体では6.0%、〔絵画〕〈デザイン〉ではそれぞれ12.2%、8.2%と一定数存在している。芸術系大学の中でも、音楽を専門とする学部と比べ、美術を専門とする学部は県内に

も数多く存在しているため、〔絵画〕や〈デザイン〉において「他大学を受験したが入試の結果で」本学を選択する者が存在することは当然であるといえよう。また「満足ではない」入学を果たした者たちが、いかに現状を受け入れ本学での生活へと溶け込んでいくのか、あるいは新たな進路を模索し選択していくのか、注意深く見守る必要があるだろう。

#### 4. 本学での生活について

本学での生活にかかわる「履修の方法や勉強について」の理解度や不安、「勉強に対する意欲」「親しい友人」の有無について尋ねた結果を表4に示した。

まず、「履修の方法や勉強の仕方については」、「よくわかる」「だいたいわかる」とする者は、全体では27.0%であり、70%以上の新入生が「少しわからない」「ほとんどわからず不安である」と答えている。〈人間発達学部〉においては半数を超える者が「ほとんどわからず不安である」と答えている。2-3の「入学した気分」において、〈人間発達学部〉が「どちらでもない」とする者の割合が高かったが、「入学できた安心感」としながら「わからない不安」の大きさで「どちらでもない」気分になっているのかもしれない。いずれにせよ、大小の違いはあれ不安を抱えていることが示されている。これらの不安は、入学後のオリエンテーションでの丁寧な説明や、大学教員や職員からのきめ細かい対応によって、少しずつ解消していくと想像される。若山<sup>6)</sup>は「入学当初の戸惑いを、大学教職員がどのように受けとめて対応するかによって、学生との距離が変化すると思われる」と述べており、大学システムへの戸惑いを大学教職員とともに解消することが、様々な思いで入学してきている新入生のその後の適応に大きく関わると推測され、一層の細やかな対応が望まれる。自分の力でできること、わからないのは自分だけではないこと、わからなくても助けてもらえる、ということが一つ一つ体験されていくよう心がけたい。

次に「勉強に対する意欲」であるが、全体では87.4%の新入生が「十分ある」「少しある」と答え、「あまりない」「ない」と答えた学生は2.8%と低く、例年同様の傾向を示した。

また「親しい友人の有無」については、何らかの形で有しているとする者（「同性にも異性にもいる」「同性のみいる」「異性のみいる」とする者）が、全体で90.4%となっている。高校生活から大学生活への移行は変化が大きく、戸惑いや不安を感じることは稀ではないが、多くの新入生のこの健全で明るい力を損なわずに、環境の変化とギャップを埋めるエネルギーとして発揮していけるよう見守っていきたい。

一方「ほとんどいない」とする者がどの学部、学科においても6%前後存在している。〔絵画〕では10.2%と他の学部・学科よりもやや高い。また「その他」「無回答」者も同様であり、「親しい友人は必要ない」という考え方や一人を好む傾向などが考えられるが、「親しい者の有無」が彼らにとって葛藤を引き起こす設問であることも示唆される。

表5 4. 現在の心境について  
4-1 自分の性格・健康・家族・対人関係・学生生活・生き方などについて悩んだりすることが

	音楽学部			美術学部			デザイン学部	人間発達学部	名芸大全体
	演奏	音楽文化創造	計	絵	アートクリエイター	計			
よくわかる	0.0	1.4	0.8	0.0	7.0	3.3	0.0	1.0	1.1
少しある	48.9	37.0	41.5	57.1	44.2	51.1	57.2	60.6	52.8
ない	35.6	52.1	45.8	30.6	44.2	37.0	35.8	18.2	34.8
無回答	0.0	1.4	0.8	2.0	0.0	1.1	0.0	1.0	0.6

4-2 困っている内容は (3つ以内)

	音楽学部			美術学部			デザイン学部	人間発達学部	名芸大全体
	演奏	音楽文化創造	計	絵	アートクリエイター	計			
よくわかる	0.0	1.4	0.8	0.0	7.0	3.3	0.0	1.0	1.1
家族の関係	0.0	1.4	0.8	4.1	4.7	4.3	3.1	4.0	3.0
経済的問題	11.1	12.3	4.2	14.3	23.3	18.5	23.9	9.1	14.7
進路	20.0	15.1	16.9	24.5	18.6	21.7	27.7	21.2	22.4
友人関係	6.7	5.5	5.9	12.2	7.0	9.8	11.3	30.3	13.7
心身の状態	11.1	5.5	7.6	18.4	16.3	17.4	12.6	5.1	10.7
その他	20.0	6.8	11.9	6.1	4.7	5.4	6.3	4.0	7.1
困っていることがない	28.9	45.2	38.9	30.6	39.5	34.8	34.0	32.3	35.0

4-3 それらについて相談できる人が身近に

	音楽学部			美術学部			デザイン学部	人間発達学部	名芸大全体
	演奏	音楽文化創造	計	絵	アートクリエイター	計			
よくわかる	0.0	1.4	0.8	0.0	7.0	3.3	0.0	1.0	1.1
いない	8.9	9.6	9.3	22.4	11.6	17.4	14.5	9.1	12.6
無回答	13.3	16.4	15.3	18.4	30.2	23.9	16.4	5.1	15.2
その他	0.0	0.0	0.0	2.0	9.3	5.4	3.1	2.0	2.6

4-4 悩みや課題について、学生相談室を利用したいと思いますか

	音楽学部			美術学部			デザイン学部	人間発達学部	名芸大全体
	演奏	音楽文化創造	計	絵	アートクリエイター	計			
よくわかる	0.0	1.4	0.8	0.0	7.0	3.3	0.0	1.0	1.1
近いうちに相談に行きたい	2.2	0.0	0.8	6.1	2.3	4.3	4.4	10.1	4.7
いつか相談に行きたい	24.4	16.4	19.5	10.2	16.3	13.0	20.1	24.2	19.4
必要を感じたら行きたい	48.9	53.4	51.7	44.9	58.1	51.1	49.7	49.5	50.4
いまのところは必要を感じない	13.3	21.9	18.6	34.7	11.6	23.9	22.6	15.2	20.3
その他	2.2	1.4	1.7	0.0	2.3	1.1	0.6	0.0	0.9
無回答	6.7	4.1	5.1	4.1	9.3	6.5	2.5	1.0	3.6



## 5. 現在の心境について

「自分の性格・健康・対人関係・学生生活・生き方などについて悩んだりすること」の有無、「困っている内容」（複数選択＝3項目以内）、それらを相談することのできる人の有無および学生相談室の利用の意向を尋ねた結果を表5に示した。

「自分の性格・健康・対人関係・学生生活・生き方などについて悩んだりすること」が「大いにある」「少しある」とする者は全体で64.6%である。粟津<sup>1)</sup>が2010年から2014年の5年間の結果を比較検討し、やや減少傾向にあると指摘しているが、本年度も引き続きこの傾向にある。一方「ない」とする者は全体で35%、〔音楽文化創造〕では52.1%と半数を超えている。教育系学部である〈人間発達学部〉では悩みが「ない」とする者が18%とかなり低い。〈音楽学部〉や〈美術学部〉〈デザイン学部〉の芸術系学部の特徴として、具体的な悩みや漠然とした不安を、芸術活動によって表現し、感情の発露が可能であることが、この差に表れているとも考えられる。しかし北岡<sup>4)</sup>、粟津<sup>1)</sup>らが述べているように、「悩みがない」「悩めない」あるいは「自身の感情の把握や言語化が苦手」な学生は増加していると言えるだろう。

一方、〈人間発達学部〉では「大いにある」とする者が20%存在しており、「少しある」と答えた者と合わせると80.8%の者が「悩みがある」としている。本来の青年期にある彼らのあるべき姿なのかもしれないし、人間の成長に関心がある学部の特質から、己の悩みにも敏感な者が多いのかもしれない。葛藤的になったり揺れ動きやすくなったりすることが推測されるため、こちらも注意深く見守っていく必要があるだろう。

「困っている内容」（複数選択＝3項目以内）については、大学全体としては「学業」が第1位（39.1%）、次いで「進路」が第2位（22.4%）、以下「経済的問題」（14.7%）、「友人関係」（13.7%）の順で選択されている。「就職・将来を考えて」本学を選択する者が多いこともあり、入学当初から「進路」については、学生の中で大きな比重を占めていることが伺える。「友人関係」に関しては〈人間発達学部〉において群を抜いて高くなっており（30.3%）、他の学部や学科では「心身の状態」の方が選択されている。

次に、悩みを相談できる人の有無を尋ねたところ、大学全体では69.7%が「いる」と答え、「いない」と答えた者は12.6%であった。「いる」と答えた者の割合が従来よりも減少しており、その理由の一つとして「無回答」率が高くなっていることが挙げられる。この設問での「無回答」は全体では15.2%と、他の設問における無回答の割合よりも相当高くなっていると言える。複数ある悩み事や困っていることに関して、それぞれで相談できる人の有無が異なってくるために「いる」「いない」では答え難いとも考えられる。あるいは直前の設問で「困っていることがない」を選択した者が、「それらについて相談できる人」についての有無を答える必要がないと判断したにすぎないかもしれない。しかし、やはり「親しい友人の有無」と同様、葛藤を引き起こしやすい質問であることが推察される。

また質問内容を“今は困っていることがなくても、以前困った時、あるいは今後困った時”に「相談できる人」がいるかどうかを尋ねるなど、なるべく多くの学生に答えてもらえるような工夫の余地があると言える。

なお、悩みや課題について学生相談室を利用したいと思うかについては、「すぐにでも」「近いうちに」と答えたものが大学全体で5.3%と概ね従来通りの結果になっている。

本学生相談室では、入学時の相談室ガイダンスで本アンケート調査を実施し、その後、相談室からの“様子伺い”のお便りを、希望する学生に6月中旬に発送している。“必要があればいつでもどうぞ”といった意味を込めた文書である。また新入生向けのイベントや、一人暮らし向けの企画等を学生支援課、保健室、学生相談室、自治会を含めた共同企画で実施している。学生の困っていることや不安を聞き、一つ一つ応えていくもので、当初は困っていることがありながら自発的に来談できない学生の声を掬い上げ、その後の来談につなげようという意図があった。最近では定着してきたこともあり、筆者はこの場自体が大切なのではないかと思うようになった。桐山<sup>3)</sup>は、「若者の思春期延長」に対してわれわれができることを考えたとき、「どんな場合でも力を発揮し誰にでもできることは、「聞く」ことではないだろうか。生の関わりの中で、自分の語りに関心をもち、受け容れてくれる聞き手がいるとき、人は自分の心に向き合い、自分の考えを深め、自分を肯定し、人間関係の中で自分らしく生きていくことができるようになり、「生活の中に話を聞いてくれる相手がいる、自分について考える機会が多ければ、その積み重ねの中で少しずつ解決されていくのではないだろうか」と訴えている。これは個別相談の重要性を改めて認識するとともに、来談に繋がらなくとも学生に自分自身のことを話してもらう場の大切さを意味している。アンケートの結果と同様、企画に対しても学部やコースによって学生の反応は別れており、それぞれの学生の特質に合ったイベントの形を常に模索し続け、学生に「自分のことを語る場」を提供していくことが必要なのではないだろうか。

## 結語

今年度の新入生アンケートの結果について報告した。基本的には従来の傾向と大きな差はなく、多くの新入生は高校生活を満足して過ごし、学部によっては早い段階から本学を志望し、高い勉学意欲を有していた。また、様々な悩みを有しながら、ほとんどの学生が相談できる人を有していた。これらは本学学生が精神的に健康で、落ち着いた豊かな学習環境を得るためのリソースを充分持っていることを伺わせた。その一方で、多くの者が大学システムへの不安を抱き、中には不本意な形で入学した者や、悩みを相談することのできる相手を持たない者も散見された。そして「悩みを悩むことができない」と推察される学生も微増していた。また、各学部・学科によって異なる傾向を有していることがわかった。われわれ相談室では本学の学生の特質に合った支援、企画を提供していくことが必要であり、一層の努力と研鑽を続けていきたい。今年度も、「学生相談室アンケート」は本

学の新入生の特質を如実に表し、今後のわれわれの活動に具体的な示唆を与える有益な資料となったと思われる。

### 引用文献

- 1) 粟津幹子・木村美奈子・佐藤勝利・菅嶋康浩・北岡智子・伊藤由夏・山内恵理子・渡邊美由記 2014年度新入生による「学生相談室アンケート」の結果に関する教育臨床心理学的考察—5年間の結果比較と共に— 名古屋芸術大学研究紀要 2015
- 2) 後藤倬男・橋本裕明・加藤友希恵・橋本容子・北岡智子 新入生による「学生相談室アンケート」の結果に関する教育臨床心理学的考察 名古屋芸術大学研究紀要 2007
- 3) 桐山雅子他 学生の主体性を育む 学生相談から切り拓く大学教育実践 学苑社 2015 27-42
- 4) 北岡智子・佐藤勝利・木村美奈子・菅嶋康浩・粟津幹子・伊藤由夏・山内恵理子 2013年度新入生による「学生相談室アンケート」の結果に関する教育臨床心理学的考察 名古屋芸術大学研究紀要 2014
- 5) 鍋田恭孝 思春期・青年期の病像の変容の意味するもの／「やみ切れなさ」「症状の出せなさ」—現代型うつ病・不全型神経症（軽症対人恐怖症など・ひきこもりから考える— 精神療法 第38巻第2号 2012 12-17
- 6) 若山隆他 事例から学ぶ学生相談 北大路書房 2010 13-56

### 参考文献

- 成田義弘 昨今の若者について 精神療法 第38巻第2号 2012 86-87
- 武田龍太郎 現代の病態に対する私の精神療法 精神療法 増刊第2号 2015 166-173
- 山下晴彦他 東大理学部発 学生相談・学生支援の新しいかたち 大学コミュニティで支える学生生活 岩崎学術出版社 2011